埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第335集

比企郡小川町

新屋敷塚

自転車歩行者道整備工事（埋蔵文化財発掘調査業務委託）報告
主要地方道熊谷小川秩父線／比企郡小川町上横田地内

2007

埼　玉　県

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1　新屋敷塚の全景（空中写真）東側から

2　塚断面と盛土状態　南北方向

序

埼玉県の道路整備の基本理念は、「人と自然にやさしい道づくり」であり、環境への負担の軽減に十分配慮しつつ、誰もが安心・安全・快適に通行できる道路空間の形成を推進しています。この基本理念に沿って、「高齢者や子供など誰もが安心・安全に通行できるよう通学路やバリアフリー歩道の整備、事故危険箇所の安全対策」を実施しております。この事業の一環として、主要地方道熊谷小川秩父線（小川町地内）の自転車歩行者道の整備が行われました。

小川町は、熊谷小川秩父線が盆地の東西を走る人口３万６千人ほどの県北西部の主要都市であります。国の「重要無形文化財」に指定された「細川紙」に代表される「小川和紙」の里として有名であり、この古代に遡る伝統工芸を活かした街づくりが進められています。

今回の自転車歩行者道整備事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として新屋敷塚があり、その取り扱いについて、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路環境課の委託を受けて当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、江戸時代の塚と溝が発見され、塚からは灯明皿や古銭などが出土しました。近隣にも「行人塚群」と呼称される方形の大小の塚が所在することから、富士山信仰等に伴う塚の性格が考えられます。

本書はこれらの発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発及び各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力をいただきました埼玉県県土整備部道路環境課、東松山県土整備事務所、小川町教育委員会並びに地元関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成19年３月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　　福田陽充

例 言

1．本書は、埼玉県比企郡小川町に所在する新屋敷塚の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

新屋敷古墳（ARYSK）

比企郡小川町大字横田561番地１

平成18年６月30日付け　教生文第２－30号

発掘調査の結果、遺跡の登録名称を以下のとおり変更した。

新屋敷塚

平成18年９月27日付け　教生文第６－23号

3．発掘調査は、自転車歩行者道整備事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路環境課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．発掘調査は、Ｉ－３に示す組織により実施した。発掘事業は平成18年６月28日から平成18年９月29日、整理・報告書刊行事業は平成18年12月18日から平成19年３月23日まで実施し、坂野和信が担当した。

5．遺跡の基準点測量及び空中写真撮影は株式会社シン技術コンサルに委託した。

6．発掘における遺構写真は坂野・橋本勉が、遺物写真は大屋道則が撮影した。

7．出土品の整理・図版作成は坂野が行い、山本靖の協力を得た。

8．本書の執筆は、Ｉ－１を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、他を坂野が行った。

9．本書の編集は、坂野が行った。

10. 本書にかかる資料は、平成19年度以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

11. 発掘調査から本書の刊行にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します（敬称略）。

小川町教育委員会　高橋好信　保田義治

凡 例

1．本書におけるＸ・Ｙによる座標表示は、世界測地系による座標値を示し、各挿図内における方位は全て座標北を指す。

2．遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて10m×10m方眼を設定した。Ａ－０グリッドの座標値はＸ＝8740.000m、Ｙ＝－49250.000mである。

3．グリッドの呼称は、北から南にアルファベット（Ａ、Ｂ、Ｃ…）、西から東に数字（１、２、３…）を振り、両者を組み合わせてグリッド名称とした（Ｂ－２グリッド等）。

4．遺構の表記記号は、ＳＤ：溝跡である。

5．挿図の縮尺は、次のとおりである。例外的なものについては、個別に示した。

遺構図	調査区全測図	１：120
	塚	１：80
	溝跡	１：60
遺物実測図	土器	１：４
	拓影図	１：３
	古銭	１：１

6．遺構断面図等に表記した水準数値は、すべて海抜標高（m）を表す。

7．本書に掲載した地形図（第２図）は、国土地理院発行１/25,000地形図（三ヶ尻・武蔵小川）を使用した。

8．土層および遺物の色調の表記は、『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に従った。

目次

序
例言
凡例
Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1．調査に至るまでの経過……1
　2．発掘調査・報告書作成の経過……2
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……7
Ⅳ　遺構と遺物……9
　1．塚……9
　2．溝……14
　3．出土遺物……14
Ⅴ　調査のまとめ……18
　1．土師器系土器の位置づけ……18
　2．塚の造営企画・計画……20
引用・参考文献……22
写真図版

挿図目次

第1図　埼玉県の地形……3
第2図　周辺の遺跡……5
第3図　遺跡周辺の塚と地形……8
第4図　塚全測図と調査範囲及び遺跡の基本土層……10
第5図　塚と盛土　南北・東西断面……12
第6図　盛土の遺物分布……13
第7図　調査区南端の溝……14
第8図　出土遺物……16
第9図　土師器系土器の位置づけ……19
第10図　塚の造営計画……21

図版目次

巻頭図版　1　新屋敷塚の全景(空中写真)東側から
　2　塚断面と盛土状態　南北方向
図版1　1　発掘調査着手以前の塚
　2　塚全景（空中写真）東側から
図版2　1　塚北側
　2　塚北西部の盛土状態
図版3　1　塚南北断面
　2　塚中央部の盛土状態
　3　塚東側の盛土状態
　4　調査区南隅の溝
　5　咸平元寶出土状態
　6　寛永通寶出土状態
　7　塚西隅の土器出土状態（1）
　8　塚南隅の土器出土状態（2）
図版4　1　土師器系土器皿（第8図1）
　2　土師器系土器皿（第8図2）
　3　土師器系土器皿（第8図4）
　4　咸平元寶（第8図16）
　5　寛永通寶（第8図17）
　6　塚盛土の出土遺物
　　（第8図5～15・18～26）

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至るまでの経過

埼玉県では、『彩の国５か年計画21』に「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を揚げて、県内道路交通網の整備を推進している。

埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課では、これら県が実施する公共開発事業にかかる埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

主要地方道熊谷小川線工事事業に係る新屋敷古墳（35-90）については、平成18年３月にその取り扱いに関する照会を受けた。３月23日の現地確認の結果、本遺跡は墳丘が残っていることと立木が多いことなどから、トレンチを設定した事前の確認調査は困難と判断した。工事計画によると、墳丘部分を現地表面まで掘削することが明らかであることから、記録保存のための発掘調査を実施する必要があると判断した。

これをうけて、東松山県土整備事務所、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、生涯学習文化財課の三者で調査方法、期間、経費などの問題を中心に事前の協議を行った。平成18年５月８日付け教生文352号で道路環境課長あてに埋蔵文化財保護に関する事前協議が整った旨を通知した。

発掘調査は、平成18年６月28日～平成18年９月29日の期間で実施された。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知は東松山県土整備事務所長から平成18年３月15日付け東整第2605号で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は平成18年３月31日付け教文第３－1092号で行った。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から文化財保護法第92条の規定による発掘調査届が提出された。発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成18年６月30日付け教生文第２－30号

なお、発掘調査の結果、遺跡は近世の塚であることが判明したため、遺跡の登録名称を「新屋敷塚」に変更した（平成18年９月27日付け教生文第６－23号）。

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2．発掘・整理報告書作成の経過

(1) 発掘事業

新屋敷塚の発掘調査は、平成18年６月28日から平成18年９月29日の契約期間で行った。

調査は平成18年６月後半に事務手続き、７月初旬に事務所設置を行い、人力による盛土の発掘調査を開始した。

７月上旬に空中写真測量と基準点測量を実施した。盛土に土層観察用のベルトを「十」字状に設定し、順次、土層断面図・平面図等の作成・写真撮影等の記録保存を行った。

調査の結果、発見された遺構は塚と溝が１条である。塚の調査終了後に、下層の調査を行い８月末に終了した。

(2) 整理・報告書作成事業

整理・報告書作成作業は、平成18年12月18日から平成19年３月23日まで実施した。

１月上旬から遺物を接合・復元し、遺物実測を行った。遺構平面・断面図の作成と第２原図の作成を１月中旬まで行った。また、遺跡全体図・遺跡分布図・遺物分布図の作成を１月中旬から後半にかけて作成した。遺物以外の図面のトレース作業は、イラストレーターによるデジタルトレースを行った。

遺構・遺物のトレース作業は、１月中旬で終了し、版組作業を行った。同時に遺物の写真撮影を行い、写真図版の作成、原稿執筆に取りかかった。編集作業を経て入稿した。３月20日に報告書を刊行した。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

平成18年度（発掘調査・整理報告書刊行）

理　事　長	福　田　陽　充
常務理事兼総務部長	岸　本　洋　一
総務部	
総務部副部長	昼　間　孝　志
総務課長	高　橋　義　和
調査部	
調査部長	今　泉　泰　之
調査監	坂　野　和　信
調査部副部長兼資料活用部副部長	小　野　美代子
整理第二課長	富　田　和　夫

II　遺跡の立地と環境

新屋敷塚は、埼玉県比企郡小川町大字上横田561-1番地に所在する。

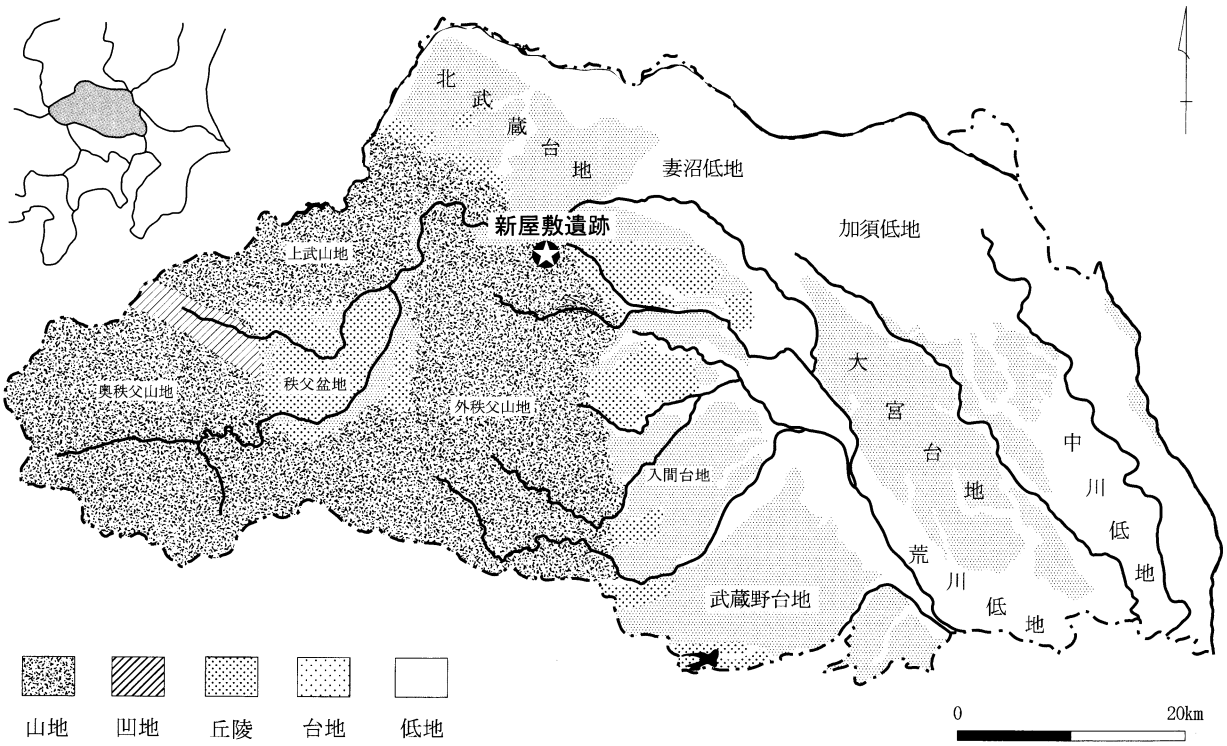
比企郡小川町は、県の中央部西寄りで比企郡の北西部に位置する。小川町の地勢をみると、秩父山地の北東部に連なる堂平山を最高峰（標高875.6m）として、笠山（837m）等の山地が西側を占めている。この山地を源とする槻川や兜川流域の沖積地と、それらの合流部に形成された盆地状地形の南西部、及び比企丘陵の西端にあたる台地と市野川及び小河川が開析した谷地形の北東部であり、これら３つの地形に分けられる。

本遺跡は、ＪＲ八高線駅の北東約３kmの比企丘陵西端部で、町の北東部にあたる。市野川とその支流新川に沿う左岸の台地先端部、標高約74mに位置する。この台地は西に向かって高さを増し、市野川に沿って南東に緩やかに低くなる。

小川町の地形的特徴から遺跡の分布は、渓谷的地形の槻川流域、及び丘陵と沖積地の市野川流域の大きく２つの地域に展開している。槻川流域では、沖積地との比高差をもつ丘陵や台地端部に散在して、遺跡が営まれることが特徴である。これに対して、市野川流域では、丘陵や台地に広く面的な広がりをもって各時代にわたり、継続的に遺跡が形成されることが特徴で、遺跡の分布密度が高い傾向が認められる。

以下に、新屋敷塚の周辺遺跡の分布について述べる（第２図）。この塚は町の北東部に位置することから、市野川流域に絞って遺跡を概観する。

縄文時代は、早期の遺跡として、条痕文系土器が６軒の竪穴住居跡から検出された市野川流域の嵐山町金平遺跡（金井塚・植木1980）、小川町日丸遺跡（２：高橋・保田1995ａ）等が確認され、下横田の越祢遺跡（41：高橋1993）では無文の尖底土器が出土している。



第１図　埼玉県の地形

前期は日丸遺跡・大杉遺跡（7）・天神屋遺跡（19）で関山期・黒浜期の土器片が出土している。また、前期後半では岡原遺跡（11）・台ノ前遺跡（14）・中井遺跡（37）・悪戸遺跡（39）等がみられる。概して市野川流域では、縄文前期の遺跡は少ない。

縄文時代中期の遺跡の多くは、丘陵上に立地するが、市野川に近い低丘陵上にも進出することから、立地の多様化がみられる。日向（47）・町場（3）・台ノ前（14）・久保ヶ谷戸（46）の各遺跡がある。台ノ前・町場遺跡は、水田に面した比高差の少ない低丘陵に営まれた遺跡で、勝坂式土器がまとまって出土している（保田・新井2002）。縄文時代後晩期の遺跡は稀薄とみられている。

弥生時代は、終末期から古墳時代前期の越祢遺跡（41）で吉ヶ谷式土器が出土したことが報告（高橋1991）されている。しかし、弥生時代後期の実態は今後の課題である。市野川の左岸であるが、嵐山町蟹沢遺跡から弥生時代終末期の住居跡が11軒検出された（川口1992）。

古墳時代の遺跡は、主に市野川流域に展開している。前期の集落としては、越祢遺跡があげられ、「S字状口縁甕」の出土した竪穴住居跡が、1軒検出されている（高橋1991）程度であり、古墳時代中期の遺跡については現在、確認できていない。

古墳時代後期では岡原遺跡（11）・寿源寺遺跡（30）・中井遺跡（37）・道下遺跡（25）・台ノ前遺跡・越祢遺跡等が確認されている。竪穴住居跡は、台ノ前遺跡で1軒（保田・吉田1997）、越祢遺跡で3軒が調査されている。

古墳時代後期古墳は、峯原遺跡（35）内の新田古墳群（36）・草加古墳群（13）があげられる。上横田の新田古墳群は4基の小円墳とされる。このうち1基（新田第1号墳）の墳丘頂部にあった樹木が、昭和41年の台風によって倒れ、「根元より石棺出土し中に御神刀等遺品あり」等と記された碑が建てられている。古墳から出土した直刀2振り等と箱式石棺とみられる埋葬施設（3尺×5尺）が、聞き取り調査によって確認されている（小川町1999）。また、新田古墳群で2号墳から4号墳の3基は、近世の塚になる可能性がある。

草加古墳群は、町の北東端で奈良梨の草加に位置し、2基の中規模円墳からなる。この2基の古墳は、町史編纂事業の一環として、平成7年から同8年にかけて3回の「試掘調査」が行われた（小川町1999）。この調査によって、周溝と墳丘規模が確認され、1号墳は直径24m、高さ1.8mの円墳で、須恵器大型甕が出土したことから、7世紀中葉から同後葉の築造年代が考えられている。新屋敷塚との関連からみれば、墳丘の南西側のトレンチから、近世の土師器系皿が1点出土していることが注目される。

草加2号墳は、直径28m、高さ4.2mの円墳で、1号墳より規模の大きい墳丘であるが、比較的しまりのない盛土であったと報告（小川町1999）されている。片状石灰岩等を使用した羨門部と前庭部が確認された。築造時期は、須恵器蓋付短頸壺等から7世紀前半に比定されている。

奈良・平安時代には、市野川に沿って面的な広がりをもつ遺跡が増加する。その立地は丘陵上と水田面との比高差が少ないことである。六所遺跡（5）の第三次調査では、8世紀から10世紀の竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡3棟（高橋1991、高橋・保田1995a）、日丸遺跡（2）で8世紀から9世紀の竪穴住居跡4軒等がみられる（高橋・保田1995）。久保ヶ谷戸遺跡（46）では、9世紀の竪穴住居跡2軒等が調査されている（高橋・保田1997）。また、大杉遺跡（7）は、町教育委員会による2回の発掘調査（保田・吉田1997）と、県埋蔵文化財事業団の2回の発掘調査（今井1991、上野1998）を併せると4回行われており、竪穴住居跡が12軒検出されている。小川町が行った1次調査では、平安時代の鍛冶炉跡、2次調査では鍛冶炉跡と椀形滓等が出土している。

昨今の丘陵上の開発に伴って当該期の遺跡の発掘調査は急増したが、10世紀後半から11世紀代の遺跡調査例は少ない。

遺跡地名一覧

1：新屋敷塚　2：日丸遺跡　3：町場遺跡　4：山ノ神遺跡　5：六所遺跡　6：都谷遺跡　7：大杉遺跡　8：東遺跡　9：一の入り裏遺跡　10：鷹巣山古墳　11：岡原遺跡　12：奈良梨館跡　13：草加古墳群　14：台ノ前遺跡　15：奈良梨陣屋跡　16：諏訪神社祭祀跡　17：高見城跡　18：関下遺跡　19：天神屋遺跡　20：伊勢下（古墳）遺跡　21：伊勢下遺跡　22：寿原遺跡　23：中津遺跡　24：蟹山遺跡　25：道下遺跡　26：片瀬遺跡　27：高谷砦遺跡　28：能満寺裏遺跡　29：宮子遺跡　30：寿源寺遺跡　31：石原遺跡　32：行人塚群　33：神戸古墳　34：峯久保遺跡　35：峯原遺跡　36：新田古墳群　37：中井遺跡　38：宮脇遺跡　39：悪戸遺跡　40：釜石遺跡　41：越祢遺跡　42：稲岡遺跡　43：西稲岡遺跡　44：経塚遺跡　45：経塚　46：久保ヶ谷戸遺跡　47：日向遺跡　48：本宿前遺跡　49：下原南遺跡　50：内郷Ａ遺跡　51内郷Ｂ遺跡　52：西ヶ谷戸西遺跡　53：越田城跡　54：幡後遺跡　55：大堂遺跡　56：姥谷遺跡

第２図　周辺の遺跡

中世では鎌倉街道と推定される「切り通し」が、市野川に沿う丘陵上の伊勢根、能増で３箇所確認されている（埼玉県立歴史資料館1983）。また、大杉遺跡（今井1991）の調査区に近接した地点（能増）にも「切り通し」が確認されている。現在の県道菅谷・寄居線の西寄りを併走する推定鎌倉街道上道のライン上とみられている。

長享二年(1488)に高見原合戦が行われたとされる高見原と、鎌倉街道上道を東に臨む丘陵上には高見城跡（17：小宮山・保田1997)、その南に位置する高谷砦跡（27）は、「陣城」として築かれた（梅沢2003）とみられる。

市野川を挟んで対岸の嵐山には、典型的山城として知られる越田城跡（53）（梅沢ほか1979）・杉山城跡が立地している。杉山城跡（村上1996）は、戦国末期の築城とされる（梅沢2003)。

菅谷城跡（嵐山菅谷館跡）は、鎌倉街道上道（南北）と都幾川（東西）との交点に所在し、「長享の大乱」の際には、都幾川・槻川に沿って並ぶ扇谷氏勢力の「前線城郭群」を形成したと考えられている。館関連の遺跡では、土塁や堀を残す奈良梨陣屋跡（15）と奈良梨館跡（12）があげられる。

六所遺跡（5）では、14世紀前後の瓦質鉢・鍋や漆椀が出土した井戸７基、溝が検出されている（高橋・保田1995ａ)。嵐山町金平遺跡では、鋳造遺跡群が発見され、「弘安四年」(1281）銘をもつ鉄鍋の鋳型が出土し注目される（村上2000)。また、越畑城跡（53）では、15世紀から16世紀代の土師器系土器の皿、瓦質の内耳鍋等が出土している（梅沢ほか1979)。

近世の遺跡は、台地上に立地する小墳丘で構成される古墳群との区別が難しい。行人塚群（32）は、市野川に向かって東西にのびる台地に立地する。この塚群は、古墳時代後期の古墳群として15基ほどが、昭和31年に県の史跡指定を受け重要遺跡に選定されていた。後述のとおり、町史編纂事業として、発掘調査が行われ、江戸時代前半期に築造された塚であることが判明した（小川町1999)。

Ⅲ　遺跡の概要

本塚は、県道熊谷・小川・秩父線の八和田小学校入り口交差点の西に接している。この塚は民家の庭先に所在し、平行する２棟の納屋に挟まれている。このお宅では「お塚」と称して、頂部には祠がまつられていた。この祠に登るため、北西辺の西隅よりの中程に、川原石が一部階段状に置かれていた。

調査地点は、西から延びる馬の背状台地の鞍部先端にあり、ほぼ平坦地を占めている。北と南は谷が入り緩やかに下がる地形になっている（第３図）。

調査面積は80㎡である。調査地点を細かくみれば、東隅がやや高く標高74.5m、西隅と南隅に向かってやや低くなり74.0mである。県道側の南東辺は、工事で一部切り取られたとみられ、標高74.0mラインが県道の切り通しの中位を走っている（第４図）。

今回の発掘調査は盛土の調査であるため、重機は一切使用せずにすべて人力によって行った。盛土の最上層は、黒褐色の腐植土に覆われていた。この腐植土を除去して、土層観察ベルトを「十」字に残し、盛土頂部から墳丘の構築状態と遺物の出土状況等を確認しつつ発掘を行った。

塚の規模は現状で、中軸線が約45度西方に振れる台形状を呈し、南東辺約9.0m、北西辺約5.5mである。しかし、民家の母屋に近い北西辺の北隅と西隅が一部削平された可能性があり、台形状と断定する根拠に乏しい。「行人塚・塚群」と同様に方形塚の可能性が高いと考えられる。また、塚の構築状態の観察から、全体としてほぼ旧形を保っていると考えられるが、盛土の高さは現状で1.6mであり、築造時にはこれよりやや高かったと推定される。塚の南隅には、片状石灰岩が60㎝×45㎝もみられるが、築造時期のものか判断できなかった（第４図）。

出土遺物は、縄文時代中期土器、平安時代の土師器・須恵器、中世陶器、中世後期・近世初期の土師器系土器、近世瓦、及び平安時代の渡来銭、江戸時代の古銭等である。

塚造営以前の溝が調査区南西隅で検出された。溝は幅約1.5m、長さ3.5m、深さ0.5mを測り、県道側に延びている。

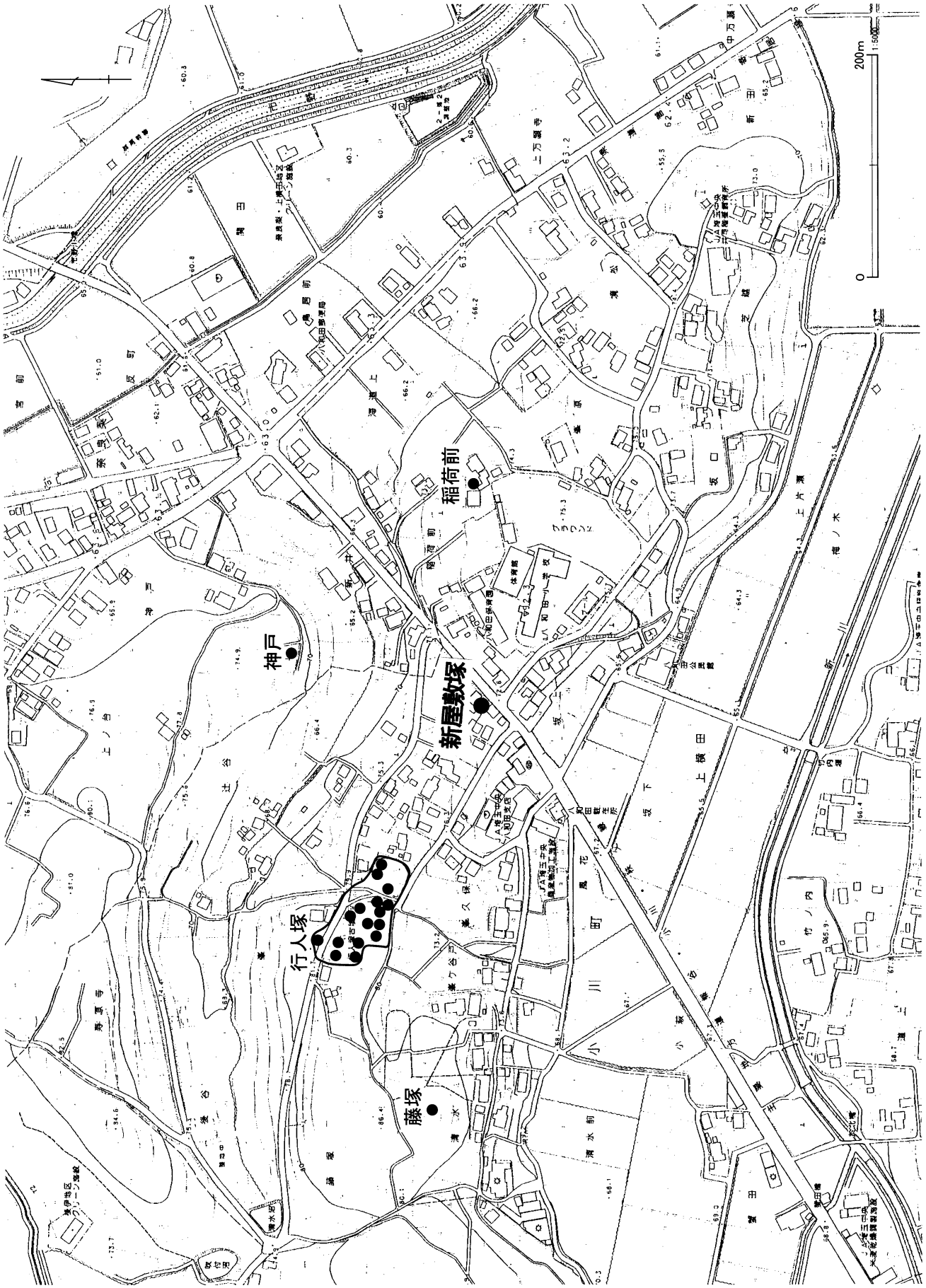
古墳と近世の塚は、前記の通り、両者とも台地上に立地する小墳丘で構成されるため、古墳と塚との区別が難しい。その一例として市野川に向かって東西に延びる台地に立地する行人塚・塚群（第３図）があげられる。

町史編纂事業として、平成４年と同５年にかけて「方墳行人塚」と「第九号塚」の発掘調査が行われた（小川町1999）。平成５年に主塚である「方墳行人塚」が発掘調査された。その結果、「方墳行人塚」の墳丘上部から、天明三年（1783）の浅間山の火山灰が検出された。また、寛永通寶や土師器系皿等が出土したことから、江戸時代前半期に築造されたことが判明した。

既に、古墳と認定されたものが塚になる可能性がある（第３図）。周辺に点在する行人塚西側の藤塚古墳、その東側の神戸古墳、また、新屋敷塚の東側の稲荷前古墳、及び新田古墳（１号墳以外）は、『小川町の歴史資料編１』で指摘されているとおり、塚である可能性が高まったといえよう。

これらの塚のまとまりと、推定鎌倉街道（埼玉県立歴史資料館1983）との関わりをみると、街道の西側にあたると考えられ、後の川越・児玉往還、現在の県道菅谷・寄居線の西で、旧上横田村と旧奈良梨村の村境に塚がまとまっているのであろう。

先記のとおり、後期古墳と考えられていた新屋敷古墳は、発掘調査の結果、近世の塚であることが判明した。後期古墳として可能性が指摘された理由は、この地域の横穴式石室の構築材として使用された片状石灰岩が、塚とその周囲に認められたためである（小川町1999）。



第３図　遺跡周辺の塚と地形

Ⅳ　遺構と遺物

1．塚

前項で述べたとおり、調査地点は東隅がやや高く標高74.5m、西隅と南隅に向かってやや低くなり74.0mで、約0.5mの比高差がある。

まず、塚写真測量図（第４図）から塚の形状と規模についてみることにする。

次に、塚断面観察と実測図（第５図）によって塚の構築状態を説明する。

(1) 塚の規模

塚写真測量図（第５図）の等高線（10cm間隔）に基づいて塚をみると、北隅は標高74.5mラインを辿ることができる。南隅と西隅及び北隅では74.2mラインで結ばれている。実測図と重ね合わせた塚の裾は、西隅で74.0mでほぼ一致している。現状では標高74.0mが塚の基底部に近いことがわかる。

塚の現状は、中軸線が座標北から46度西に振れる台形状を呈する。南東辺約9.0m、北西辺5.5mである。塚は現状で高さ1.6mを測るが、これよりやや高かったと推定されることから、実測値より平面規模も若干上回ると考えられる。

塚の等高線をみると南隅と東隅は、間隔が広く削平を受けていたとみられるが、南隅と東隅から頂部に向かうコンタラインは比較的整っている。また、塚の頂部から南隅・東隅に向かって、緩やかであるが稜線もみられる。南隅と東隅を比較すれば、より南隅の等高線が整っていることから、この部分の塚の形状が旧形に近い姿であったと推定できる。

同様に西隅と北隅をみると、西隅から頂部に向かう等高線は、北隅より整っている。西隅の頂部に向かう稜線は、北にややずれているが辿ることもできる。また、南隅と東隅に比較して、中位以上の等高線がやや密である。この状況は概ね北隅から頂部に至る塚の形状にもみることができる。このように現状では、西隅・北隅と南隅・東隅とは、塚の形状が異なる点を指摘することができる。

つまり現状では、塚の北半と南半の形状には、差異が認められる。この形状の差異を考慮して、塚を観察することが必要である。

(2) 塚の形状

写真測量による情報と塚の観察結果を手掛かりに、塚の形状について述べる。上記のとおり、比較的保存状態の良い南隅と東隅からみて塚は、方形に造られた可能性が高い。南東辺は県道工事の切り通しで一部削平されたとみられる。しかし、南と東の２つの隅はほぼ旧状を保っていた。南東辺は、南・東の２つの隅の距離を測ると9.0～9.1mの範囲である。また、この２つの隅から塚中軸線と直角に交わる交点までの距離を測る。

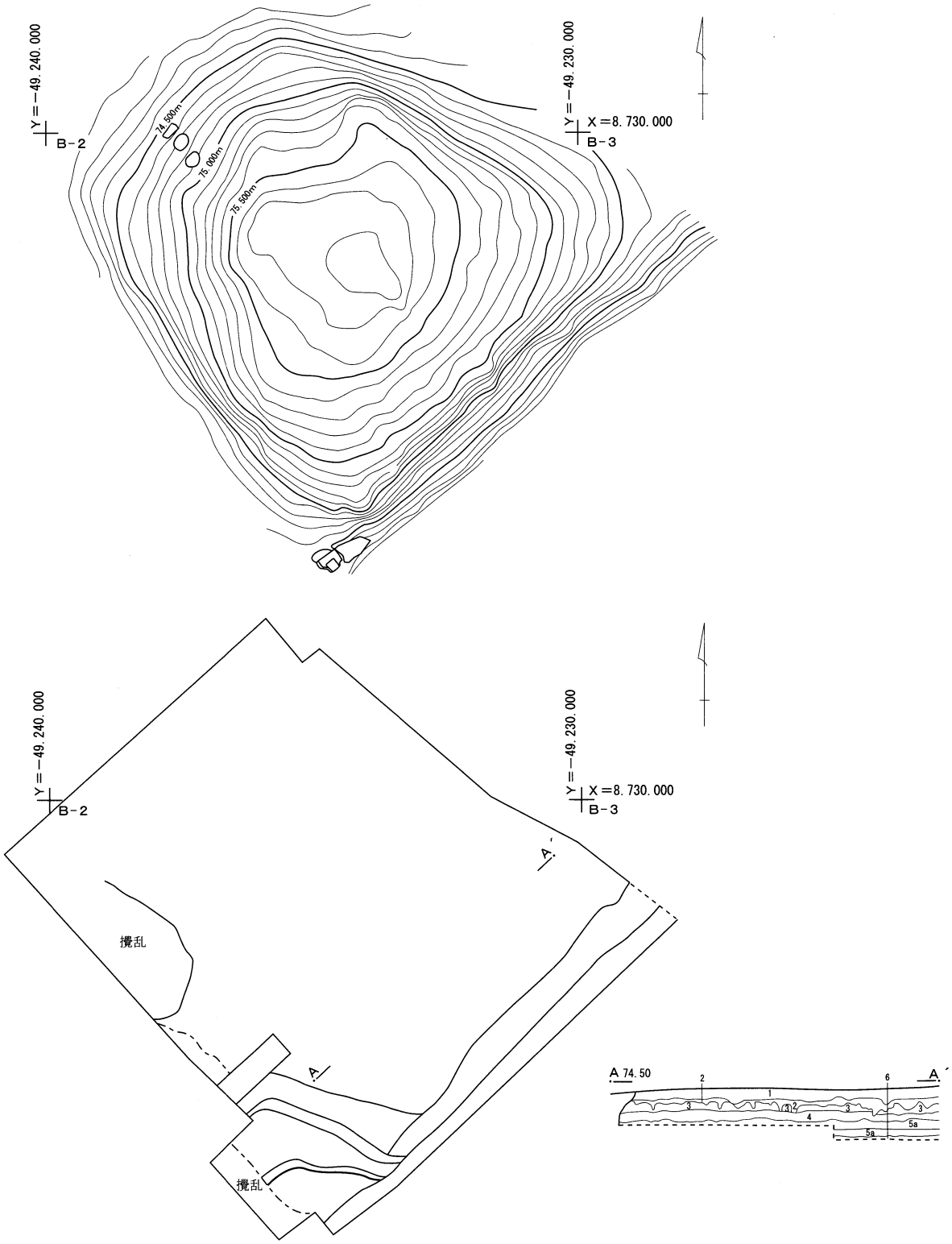
南隅から塚中軸線＝6.3m、東隅から塚中軸線＝6.3mである（第10図１）。この結果、塚の南隅・東隅から盛土は、ほぼ対照に造られていたと推定できる。本来塚が左右対称に造られていたとすれば、塚中軸線と直角に交わる交点を折り返した位置に北西辺と北隅・西隅が造られたと考えることができる。塚の写真測量図に重ねてみると、北隅と西隅が大きく削平され、北西辺と南西辺及び北東辺の裾部が削平されたことがわかる（第５図）。

したがって、新屋敷塚は方形の盛土をもつ塚であると推定できる。

(3) 塚の造営

以上の認識と実測値に基づいて、江戸時代に使用されていた尺度との関係から、塚の造営について検討する。

江戸時代には曲尺「かねじゃく」、また、竹尺「タカハカリ」と呼称される伝統的尺が使用されていた。曲尺は大陸系統の大宝尺の系統・系譜であり、狭い意味での大工尺のみではなく、広く建築造営尺として用いられていた。竹尺は主に絹等の布帛の寸法を計ることに使用された。伝統的曲尺は、ほとんど鎌



基本土層
1　Hue7.5YR5/8　明褐色　漸移層
2　Hue7.5YR5/6　明褐色　ソフトローム層
3　Hue7.5YR4/6　褐色　ハードローム層　固くボロボロ
4　Hue7.5TR4/4　褐色　３層より黒色が強い　固くしまっている　ブラックバンド
5　Hue7.5YR3/4　暗褐色　３・４層に比してやわらかい　ブラックバンド
　a　bよりも黄味がある
　b
6　Hue7.5YR6/2　灰褐色　粘土層

第４図　塚全測図と調査範囲及び遺跡の基本土層

倉時代から江戸時代まで変化がなく、主流の尺度といわれている（小泉1977）。

江戸時代中期の吉宗治世の享保年間には、曲尺より１尺で約３厘長い「享保尺」も使用されていた。さらに「折衷尺」が使用され、江戸時代には尺度に関する度量衡は統一されていなかった。

享保尺は徳川吉宗の治世、享保年間（1716～36）とされ、折衷尺は伊能忠敬が、享保尺と曲尺の一種である又四郎尺（曲尺）を平均して、沿岸測量に用いたというものである。

ここでは塚の造営について、近似値が得られる曲尺と享保尺及び折衷尺による検討を行う。

そもそも江戸時代の尺度自体が多様で統一性がないため、１尺の実態は不明瞭と言わざるを得ない。したがって、明治度量衡制の決定に関わり、「内藤五観」が所持したとされる江戸後期の又四郎尺（曲尺）、享保尺、折衷尺の数値（小泉1977）に基づいて、塚の造営計画を検討する。

又四郎尺（１尺）＝30.256cm

（享保尺より約３厘　短い曲尺）

享保尺（１尺）＝30.363cm

折衷尺（１尺）＝30.303cm

南東辺は、誤差を考慮して9.0～9.1mの間として計測することができる。

9.0m÷30尺＝30.00cm　9.1÷30尺＝30.333cm

塚の造営尺は１尺平均＝30.166cmと推定することができる。

南隅・塚中軸線交点＝6.3m÷30.166cm≒21尺

東隅・塚中軸線交点＝6.3m÷30.166cm≒21尺

程とみることができる。１尺＝30.166cmの数値は曲尺との違いが最も少なく0.09mmである。また、１尺当たり、享保尺と0.197mm、折衷尺0.137mmの差異である。したがって、塚の造営尺は曲尺が使用されたた可能性が導かれる。

塚は江戸後期の曲尺の１尺30.256cmより短い、大宝尺系統・系譜の曲尺を目安として、計画し造営されたとみることができる。

以上に検討した３種類の尺度のうち、どの尺度を採用しても１尺30.30cm前後であり、塚の１辺が30尺であったことには変わりがない。したがって、新屋敷塚は30尺を基準に方形に造営されたことが導き出されたといえる。塚の造営計画が導き出されたことから、塚の形状を復元することができる。即ち、塚は曲尺で１辺30尺を基準とする正方形に計画された可能性が高い。加えて、塚の頂部には比較的平坦で方形状のラインが推定できるため、その立面形は、塚の頂部に緩やかな傾斜と平坦面をもつ左右対称の台形状を呈していたと想定することもできる（第５図）。この台形状の立面形は、Ｖ－２のまとめで述べる行人塚（主塚）でも認められる。

(4) 塚の構築状態

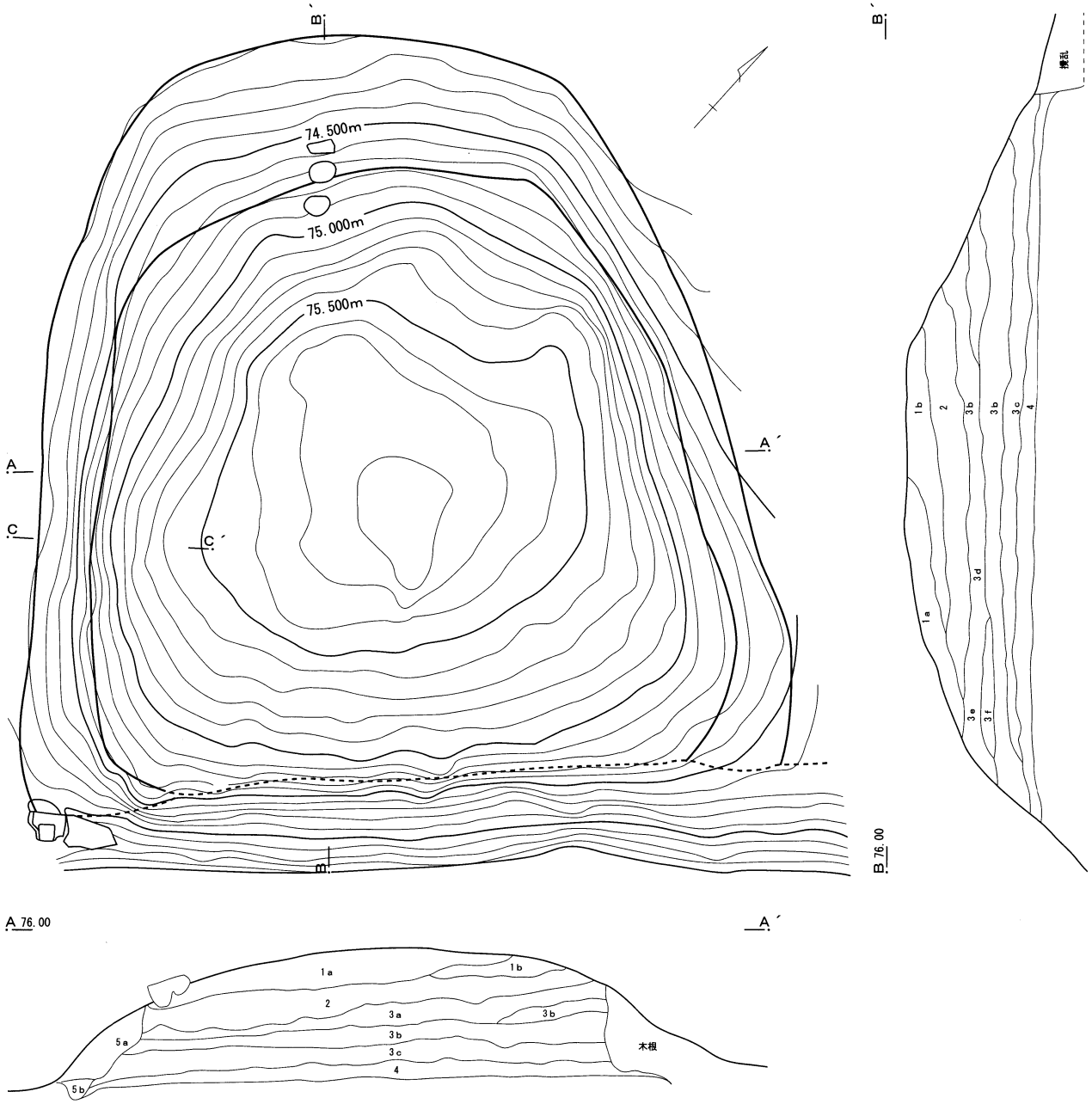
断面観察と実測図（第５図）によって、塚の構築状態を説明する。

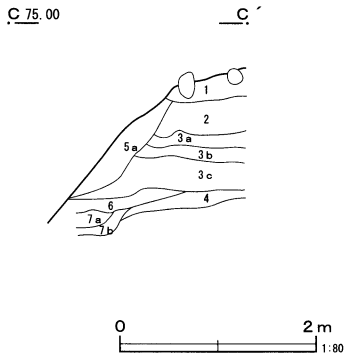
塚の盛土は、基本的にロームブロック・ローム粒子を多く含む明褐色土と、腐植土混じりの暗褐色土によって形成されている。この盛土は地形に沿って、ほぼ水平で互層に積み上げられたもので、塚の基本的盛土である。

層序は大きく６層に区別できる。水平に積み上げられた盛土は、40cmから20cm前後で、最上層部層（１ａ・１ｂ）と２層が厚く40cm前後である。３ａ層より下部は15cmから20cm程度で薄い。また、塚は広く水平で互層の盛土層と、その両側にブロック状に盛られた積み土で構築されている。

盛土の土層観察については、第５図に示したとおり基本層位は６層であるが、さらに１層ａ・ｂ、３層ａ～ｆ、５層ａ・ｂ、７層ａ・ｂに細かく区別できる。盛土は基本的に、上層から褐色土と明褐色土、暗褐色土と明褐色土が互層に積み上げられている。しかし、版築工法が用いられた様子はみられない。

南北・東西両断面共に最上層（１ａ）は、腐植土が多く混じるやわらかくて、さらさらとした質感をもつ褐色土である。この下層に少量のロームブロックとローム粒子を多く含む１ｂ層が認められる。ま

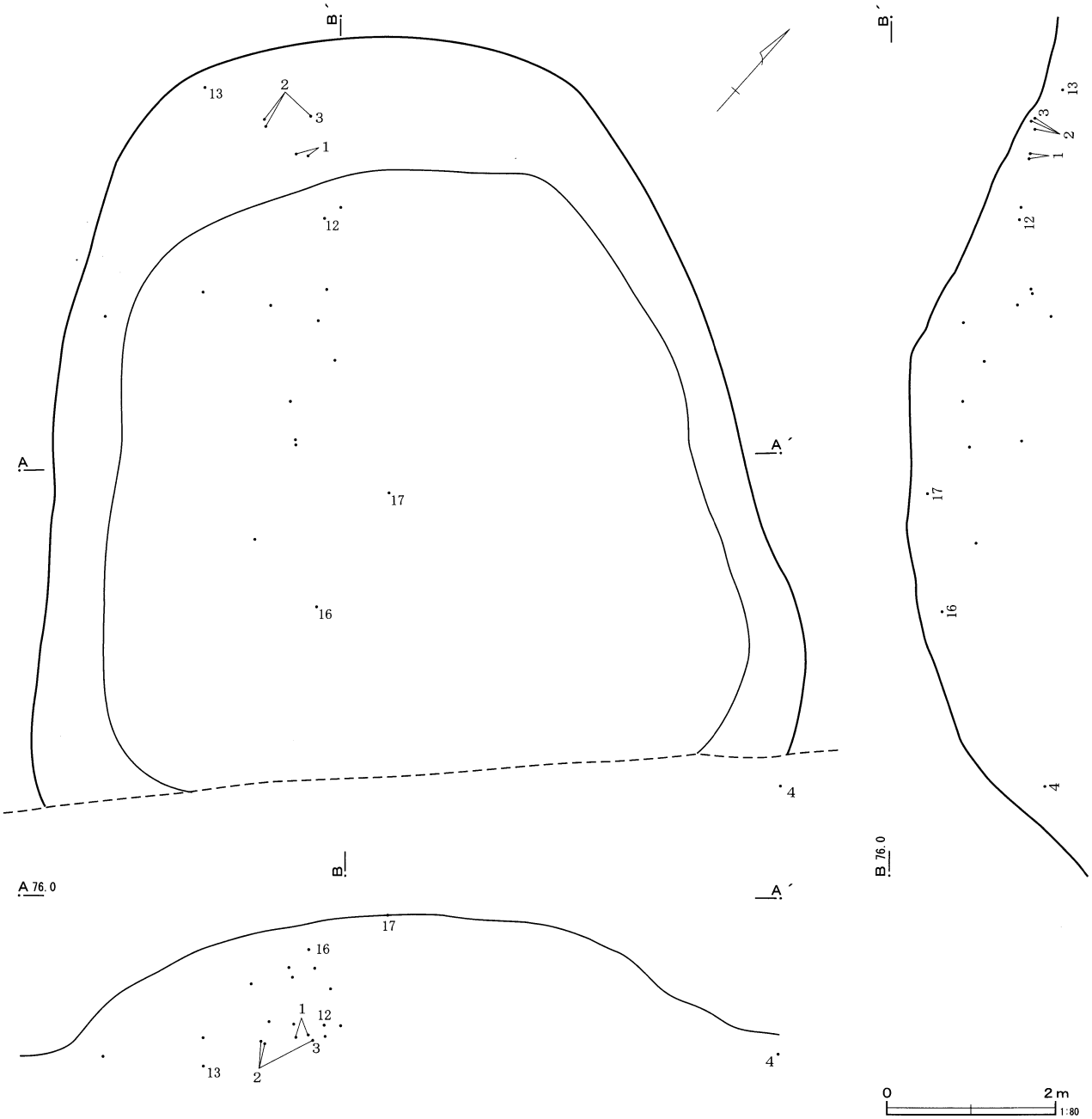




塚

1　Hue7.5YR4/4　褐色
　a　ローム小ブロック少　ロームブロック極少　やわらかい　サラサラしている
　b　ローム小ブロック少　やわらかい　サラサラしている
2　Hue7.5YR5/6　明褐色　ロームブロック多　ローム粒子多　多少しまっている
3　Hue7.5YR3/3　暗褐色
　a　ローム小ブロック少　ローム粒子少　黒褐色ブロック少　多少しまっている
　b　ロームブロック中　ローム粒子少　多少しまっている
　c　ローム粒子少
　d　ロームブロック多　ローム粒子中　多少しまっている
　e　ローム小ブロック少　ローム粒子少　黒褐色ブロック中　多少しまっている
　f　ロームブロック少　ローム粒子少　黒褐色ブロック中　多少しまっている
4　Hue7.5YR3/4　明褐色　ロームブロック多　ソフトローム　地山
5　Hue7.5YR5/4　にぶい褐色
　a　ローム粒子少　やわらかい　ボソボソ
　b　ローム小ブロック少　ローム粒子少　やわらかい　ボソボソ
6　Hue7.5YR3/3　暗褐色 ローム粒子少　ローム小ブロック少　しまりない
7　Hue7.5YR4/3　褐色
　a　ローム粒子多　しまりない　やわらかい
　b　ローム粒子多　ロームブロック中　しまりない　やわらかい

第５図　塚と盛土　南北・東西断面



第６図　盛土の遺物分布

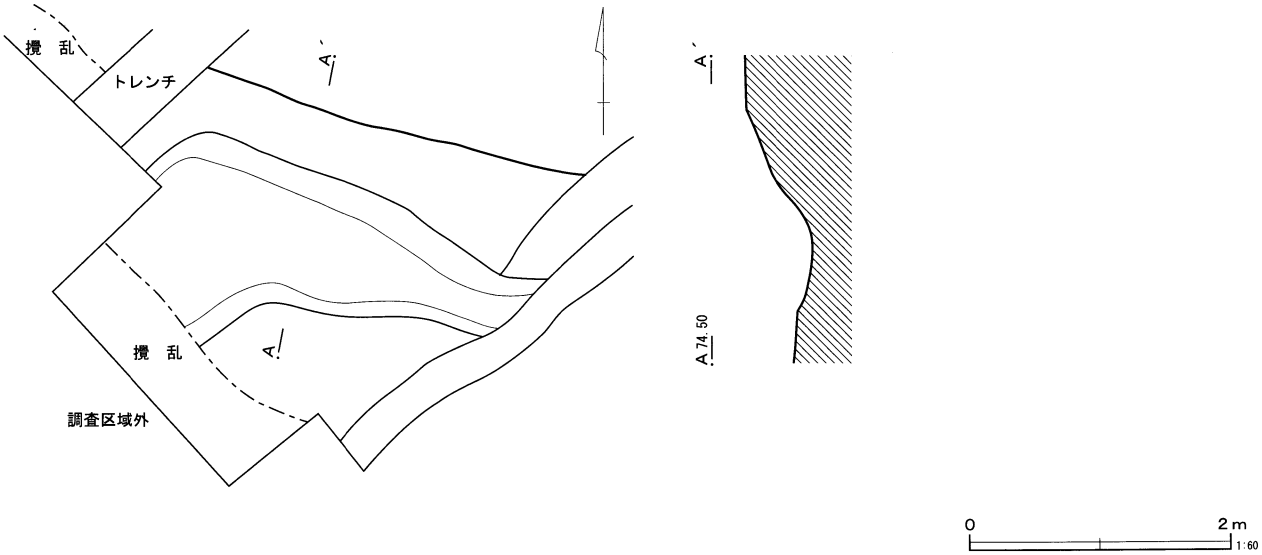
た、塚の頂部にみられる平坦面は、方形状ラインの推定に繋がる可能性がある。

次に、２層は明褐色でロームブロックを多く含む、比較的しまりの良い厚さ40cm程の盛土で、塚上部を形成している。塚の中位から下部の盛土は３層に分けられ、上半部に比べて薄く広く積まれ、比較的しまりをもつ盛土である。南北断面３層（３ａ）の北側には、３ｂ層との間に、３ｅ層と３ｆ層がブロック状に積まれている。３ｅ層は３ａ層以前であり、３ｆ層は３ａ層の後に積まれたものである。また、南側では３ａと３ｂとの間に３ｄ層がブロック状に盛られている。

東西断面の東側にも南北断面と同様、３ａと３ｂ層の間に３ｄ層が認められるため、塚中位面の形成時に一端、塚の廻りにドーナツ状の盛土が行われたと考えられる。最下部の３ｃ層は、ローム粒子が少なく、やや黒みを帯びる褐色を呈する。旧表土と混じり合った可能性をもつものと考えられる。東西断面の西側裾は、樹木根によって攪乱を受けており、５ａ層はその影響を受けた可能性が高い。

2．溝

塚造営以前の溝(SD1)が調査区の南隅で検出された（第７図)。北側のコーナー部分とみられ、溝は幅約1.5m、長さ3.5m、深さ0.5mを測り、東は県道側に延びている。南東側は細くくびれて幅50cmほどである。北側の肩は高いが緩くおちており、南側はごく浅いものである。また、南西端は攪乱を受けている。遺物は土師器系皿の小破片が一点出土している。



第７図　調査区南端の溝

3．出土遺物

塚から出土した遺物は、縄文時代中期土器、平安時代の土師器・須恵器、中世陶器、中世後期・近世の土師器系土器、瓦質の鉢、近世丸瓦、及び平安時代の渡来銭、江戸時代の古銭等である。

所謂「かわらけ」は、西日本と東日本を含めた中世土器・近世土器の広い意味をもつ概念であり、ここでは、中世の土師器系土器に繋がる土器として、近世土師器系土器と呼称する。

遺物の分布は北西側に多いが、江戸時代の主な遺物の分布は、塚の頂部、南東隅、北西隅の３箇所に認められる。

1　遺物の出土状態

塚と関わりをもつ遺物の出土状態について述べる。まず、比較的集中して出土した北西隅の分布についてみる（第６図)。

北西隅でその裾から出土した陶器の灯火具（13)は、塚と民家の生活空間との境からの出土であり、本塚の造営時期に関わるものとはいえない。

北西隅の東寄りで、塚の裾部から出土した土師器系土器の皿(2)と、内面黒色の土師器系土器の皿(1)は、まとまりをもつ出土状態である。後に述べるが、灯火具として利用された使用痕跡(タール状の付着)が内面に認められる。

塚中央部から南隅に寄った位置で、平安時代の渡来銭「咸平元寶」(16)、「寛永通寶」(17) が塚の上層部から出土した。寛永通寶は完形品で盛土の最上層、その直下からの出土であり、塚の頂部に祭られていた小祠と「おつか様」との関わりが推定される。咸平元寶はやや深い位置であるが、１層からの出土である。

一方、咸平元寶は半分ほどの破片であり、塚の構築過程で混入したものと考えられる。

塚の南東隅で土師器系土器の皿が１点出土 (4) している。塚の末端であり、県道切り通しの斜面にか

かる位置である。この土師器系土器の皿の出土により、塚の南東隅末端がかろうじて検出されたと考えられる。

近世の丸瓦片が塚中央寄りの南側で、盛土の上層部から出土している。

この他に、盛土から瓦質内耳鍋、同鉢等の小破片が数点出土している。また、縄文時代中期の加曽利ＥⅡ式土器が、盛土から出土している。量的には少ない。また、平安時代の土師器坏、須恵器の坏・壺の小破片、中世の常滑焼きの甕が出土している。これらの各時代にわたる土器類と盛土との層位的関係は認められないため、出土位置の記述は省略する。

２　塚の出土遺物

(1) 中世後期・近世（第８図１～13・15・17）

中世後期の遺物が塚の盛土から出土しているが、塚の造営に伴う遺物は近世とみられるため、近世の遺物を中心に述べる。

土師器系土器は、実測可能な皿が４点出土している。器高の高低と法量による差異から、４タイプに分類できる。

１は口縁部の立ち上がりが高いものである。口径9.4cm、器高2.7cm、底径6.4cmを測る。底部は比較的大きく造られ、両端が凸状に張り出すことが特徴である。器壁は厚く口縁端部は丸くおさめられる。轆轤成形され、底部回転糸切りである。胎土は灰褐色を呈し、細砂粒を含み胎土と焼成共に良好である。また、口縁部内面に光沢をもつ黒色タールが付着し、灯明皿として再利用されたものである。Ｖ－１で述べるとおり、17世紀初頭とされる（長佐古2006）。

２は底部が比較的小さく、口縁部の立ち上がりがやや低いものである。口径10.0cm、器高2.8cm、底径5.2cm。底部は回転糸切で、底部内面及び口縁部は横ナデによる調整が施されている。器壁は底部が厚く、口縁部との差が少なく変化に乏しい。胎土は淡褐色を呈し、砂粒が多くザラザラした感触をもつ。見込みの一部に黒色付着物がみられ、主に底部外面に煤が付着している。二枚組として再利用された灯火具の下皿と考えられる。

３は浅い底部の小破片で、推定口径13cm前後、底径5.9cmを測る。比較的薄く造られ、底部に粗い糸切り痕がみられる。胎土は淡明褐色を呈し、砂粒が多く含まれる。

４は最も器高が低いもので、見込みの中央に円形の低い凸状部が造られることが特徴である。口径10.2cm、器高2.1cm、底径6.4cm。口縁部内外面及び凸状の周辺は横ナデされているが、外面に凹凸が目立つ造りである。このタイプには、外面に横ナデの際の「ヌタ」痕が観察される。器壁は全体に厚く、底部は回転糸切りのまま未調整である。胎土は暗灰褐色を呈し、砂粒を多く含み多孔質である。

５はやや時期が遡る内耳鍋の口縁部で、一端外反して開き、上位で立ち上がる比較的深い造りである。推定器高5.5cm。口縁端部は内側に向かって緩く傾斜し、内耳上端の接合部がみられる。横ナデ調整されている。また、外面は煤が多く付着している。胎土は明褐色を呈し、細砂粒を含むが瓦質で焼成と共に良好である。

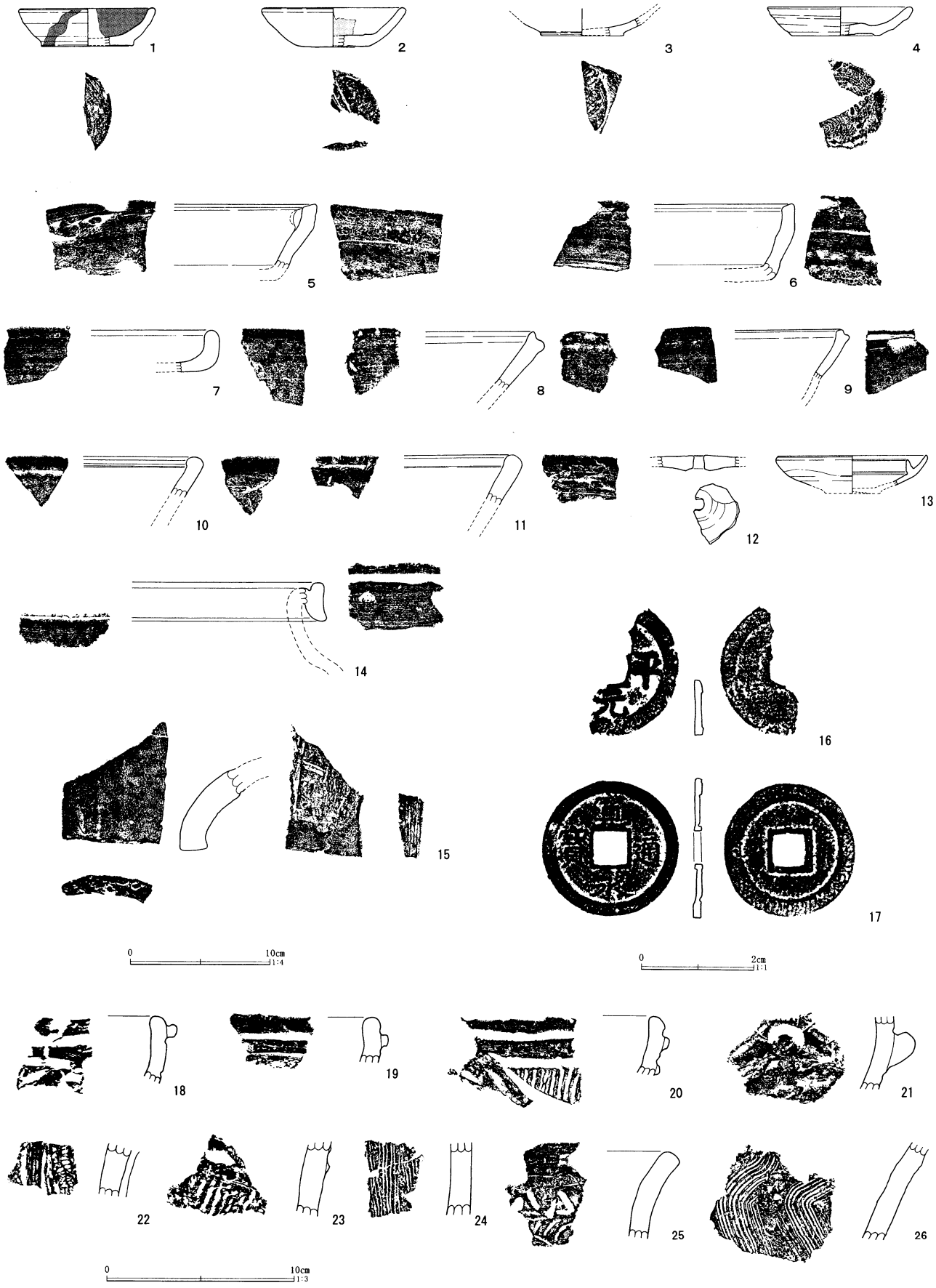
６は口縁部が中央で張り出す内耳鍋で、口縁端部の内傾が鋭角である。器高5.6cm程である。横ナデ調整されている。また、外面に煤が付着している。胎土は明褐色を呈し、砂粒をほとんど含まないもので、瓦質で焼成と共に良好である。

７は浅い鍋の小破片で、口縁端部が丸く造られ器壁が厚い。内面は赤褐色で、外面には煤が多く付着している。胎土は赤褐色で細砂粒を含み、焼成共に良好である。

瓦質の鉢も小破片であるが、口縁部の形状の異なる４点がみられる。８から11は中世後期に遡る可能性がある。

８は口縁端部内面が摘み出され、その外面を丸くおさめている。外面に煤が付着していることから、再利用されたとみられる。胎土は褐色で砂粒を少し含む。焼成は良好。

９は丸く突出する口縁端部で、その外面を小さく


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
0
10cm
1:4
0
2cm
1:1
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
10cm
1:3

第８図　出土遺物

丸めている。器壁が薄く口縁上部で広がる器形とみられる。胎土は、淡灰褐色を呈し、細砂粒を多く含み、焼成共に良好である。

10は口縁端部内面が丸く肥厚する。胎土は淡灰色で細砂粒を含む。11は内面がわずかに肥厚して丸く造られている。胎土は暗青灰色を呈し、細砂粒を含む。10、11共に焼成良好である。

12は中央部に焼成以前の円孔（0.5～0.7cm）が穿たれている。また、中央部が厚く円孔に向かって小さい面取りがみられる。胎土は明褐色を呈し、多孔質で軽い。用途に関しては不明。

13は受け皿付き専用灯火具で、口縁内側に環状の受け皿が巡らされるものである。この受け皿が口縁端部より低い位置にある。口径10.6cm、器高2.7cm程である。内面と口縁部外面の上半に褐色の鉄釉が施されている。胎土は淡明褐色で焼成共に良好である。油を回す切り欠き部分は欠損している。瀬戸美濃製品とみられる。

15は丸瓦狭端部の破片で、厚さ２cm前後を測る。端部はヘラ切り、内面は未調整であるが、外面は縦方向のナデが全面に施されている。胎土は淡灰色を呈し、砂粒を多く含むが、焼成は良好である。

17は寛永通寶で完形品、直径2.3cmである。初鋳は寛永十三年（1636）とされている。この寛永通寶が初鋳でないことは明らかであり、盛土の最上層、その直下からの出土であるため、後に供献された可能性が高い。

(2) その他の遺物

縄文時代（第８図18～26）

本遺跡から出土した縄文時代の遺物は、中期後葉土器群の破片が少量であった（谷井・宮崎1982）。

18～24は加曽利Ｅ式のキャリパー系土器で、18～21は口縁部破片である。18～20はやや内湾して開く口縁部破片で、断面カマボコ状の隆帯で口縁部上端区画と、左右に連結する渦巻文を構成するものである。18は地文の撚糸文Ｌ上に、二本隆帯の繋ぎ弧文状の渦巻文を連結するモチーフを描く。19は口縁部の地文に、単節ＬＲを施文する。20は口縁部の渦巻文の構成や、地文が不明瞭である。21は口縁下端部に突出する渦巻文を施文するもので、頸部に無文帯をもつ。

22～24は胴部破片である。22は隆帯懸垂文を垂下し、地文に単節ＬＲを縦位施文する。23は二本の低隆帯で胴部を区画し、地文に太い撚糸文Ｌを施文する。24は懸垂文等みられないが、条線状の細かな撚糸文Ｒを地文とする。

25は口縁部の開く深鉢形土器で、やや幅狭の口縁部無文帯を交互刺突文で区画し、胴部の斜線区画内に重弧文状の沈線を施文する。曽利式系土器で、東信地方の「郷戸式」に近似する。

26は蛇行条線を垂下する、鉢形土器の胴部破片と思われる。

18～24は加曽利ＥⅡ式古段階に比定される土器群で、25はそれに並行する曽利系の土器、26は加曽利ＥⅢ式に比定されるものと思われる。

加曽利ＥⅡ式平行のキャリパー系の深鉢形土器（18～24）と曽利系の深鉢形土器（25・26）が出土している。何れも小破片である。

平安時代（第８図16）

16は中国北宋の渡来銭「咸平元寶」で、真宋の咸平元年（998）に初鋳されたものであることが確認されている（永井編1996）。塚から出土した咸平元寶には、「元」の「ノ」下に鋳型の笵傷が認められる。復元径2.3cmである。この咸平元寶は、初鋳のものと文字の書体が一致するため、同笵とみられる。笵型に傷が認められることから、鋳型の笵傷が進行した笵型で鋳造されたことが明らかである。

中世前期（第８図14）

14は常滑製の甕の口縁部で、所謂「N」字状口縁部と呼称されるもので、胎土は暗灰色で砂粒は多いが焼成良好である。13世紀後半の製品とみられる。

V　調査のまとめ

1．土師器系土器の位置づけ

塚の西隅と東隅から出土した土師器系土器の年代的位置づけについて、若干の説明を行っておきたい。

(1) 類似例

新屋敷塚から出土した土師器系土器は、Ⅳ３で述べたとおり、器高の高低と法量による差異から４タイプに分類できる。ここでは、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄタイプと呼称するすることにする（第９図）。

近傍の行人塚（主塚）出土（５・６）、また、土師器系土器の暦年代が推定できる東京都下の資料、八重洲北口遺跡1264溝出土例（８～13）を参考に手掛かりを得たい（後藤・金子2003）。この遺構は1264溝と省略する。

Ａタイプ１は、新屋敷塚の周辺には類似例が求められないため、暦年代の推定と併せて、1264溝出土８と比較する。両者の共通点は、底部の造り方と口縁部の形状、及び器壁が厚いことである。法量はⅣ３で述べたとおりで省略するが、８は口径9.4、器高2.5、底径6.2cmでほぼ同一である。両者の共通点は、底部の両端が凸状に張り出す点である。また、両者の差異は、新屋敷塚のＡタイプは、内湾して口縁部が立ち上がるもので、これに対して、後者は内湾する特徴があまりみられないことである。

Ｂタイプ２は、底部が丸くおさめられるもので、器形の変化が乏しい。９を類似例としてあげるが、器高が2.5cmとやや低い。法量は２に比べて口径10.6、底径5.6cmで、わずかであるが共に９が上回る。

Ｃタイプ３は、法量の最も大きいもので、底部の両端が小さく突出する。５は行人塚出土で底部が厚く造り方に違いがみられる。後述する1264溝出土10・11の底部の造り方に類似する。同時に３者の共通点は底部の両端が小さく突出することである。

Ｄタイプ４は、行人塚（主塚）において出土した６と類似する。両者は、器高が低く轆轤の凹凸が目立つものである。前者の口縁部の傾きは緩いが、後者は立ち上がりが強い点が異なる。新屋敷塚のＤタイプと比較するために、1264溝出土の12・13をあげる。12と13は類似する器形であるが、法量に大きな違いがみられる。４の器形と法量は13に近いが、12の見込み中央部に凸部が造られること、及びこの周囲にナデがみられる点が４と共通する。

行人塚の６は、1264溝出土例の中に認められ、器形・法量共に類似するものが認められる。つまり、新屋敷塚と行人塚（主墳）は、ほぼ同様の時期であり、その範疇に位置する多様な土師器系土器群の器主構成の一部が認められたといえよう。

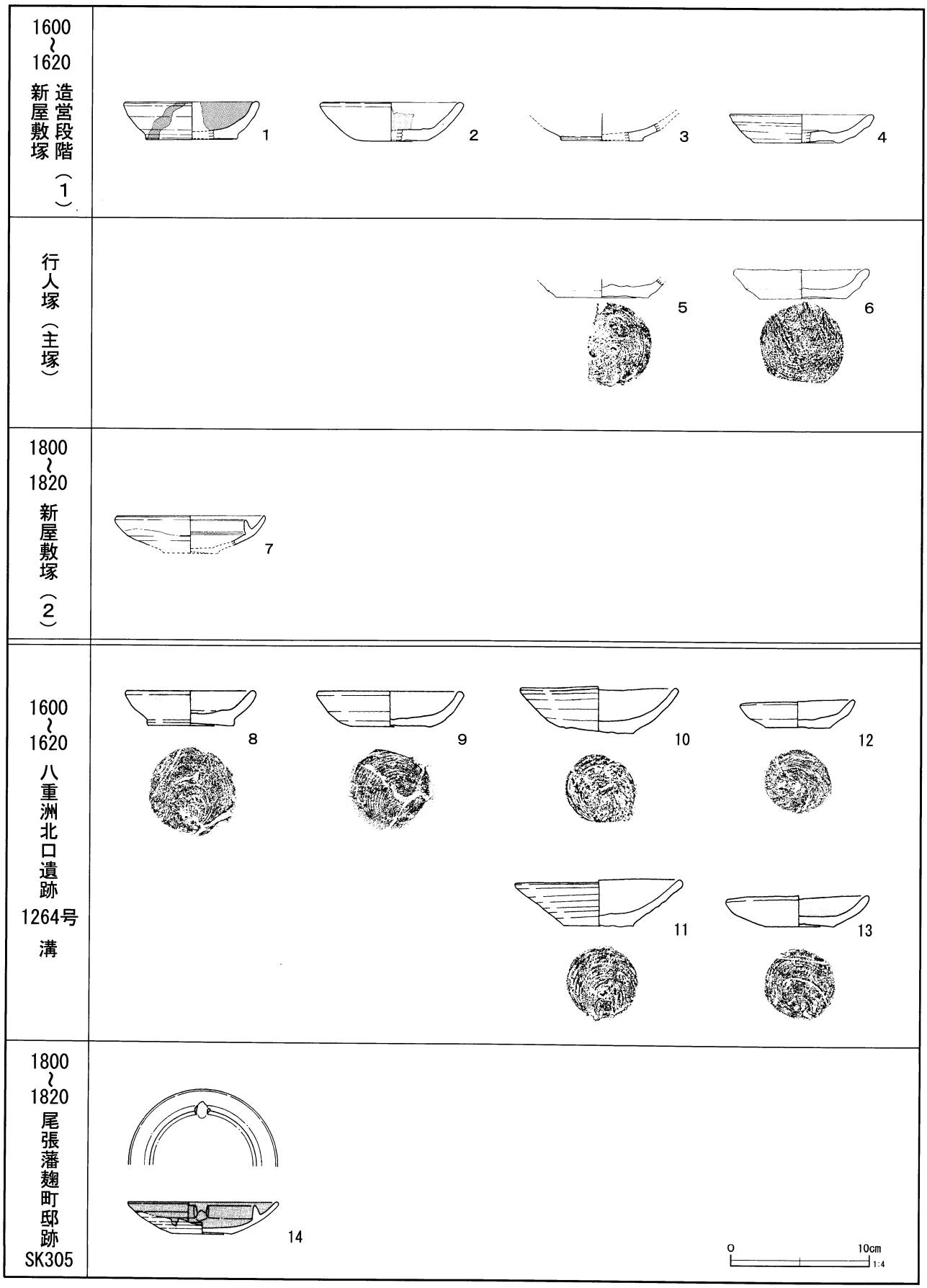
なお、瀬戸美濃系の受け皿付き灯火具７は、尾張藩江戸屋敷の麹町邸跡SK305出土14に類似例が認められる（後藤1994）。

(2) 土師器系土器の暦年代

江戸の各遺跡から集中して出土する近世陶器は、各地の古窯跡における変遷過程が分析されてきた。また、消費地における主な器種の「陶磁器生産地組成」の変遷と各器種の消長が分類されている（長佐古2006）。この検討結果に基づいて、４つのタイプに分類した新屋敷塚出土の土師器系土器の暦年代を求める。

上記のとおり、行人塚と八重洲北口遺跡1264溝出土の土師器系土器に類似例が認められれた。この時期は、「近世の特徴－多器種構成の様相が成立する」。また、「器種消長－第一期の画期を認める」とされ、「慶長後期～元和前期」（1600～20年）、17世紀初頭頃に位置づけられている（長佐古2006）。この裏付けとして、川越城跡（金子2001）の16世紀後半に位置づけられる、Ⅳ期後半SX4の土師器系土器の多様な器種構成から派生した後続系譜の土器組成の一部を新屋敷塚の造営期にみることができる。

次に、器種消長の「第二の画期」で、元禄・宝永期に登場した器種は、その終末とされる17世紀後半



第９図　土師器系土器の位置づけ

の尾張藩麹町邸跡SK109～SK317段階の宝暦・明和期頃に衰退すると指摘されている。瀬戸美濃系の受け皿付き灯火具７は、その終末期の享和期、19世紀初頭頃に推定される（長佐古2006）。

２．塚の造営企画・計画

土師器系土器の検討から、新屋敷塚と行人塚の造営年代は、江戸時代初期の17世紀初頭頃に推定できた。従来の研究では、塚の企画や造営計画について考察した事例及び文献は少ない。

ここでは新屋敷塚と行人塚・塚群の造営計画について、簡単に説明しておきたい。

江戸時代の尺度については、Ⅳ－１（3）で述べたとおり、度量衡の定めがなく統一されていなかった。尺度の変遷をみると、この時代に主流であった曲尺と布帛を計る竹尺だけでなく、江戸中期の享保尺と次いで、寛政年間以降の江戸後期に折衷尺が使用された。

新屋敷塚の造営には、建築造営に広く使用された大陸系統の曲尺を基準尺としていたことが導き出された。この造営基準尺は、塚造営期の土師器系土器、江戸初期の推定年代からみても、享保尺成立以前の曲尺が使用されたことが確かめられる。ちなみに、大宝尺は成立当初１尺29.6～29.7cmであり、時代が降るにしたがって延びていることが知られている。

新屋敷塚の造営計画を復元すれば、曲尺で30尺を１辺とする方形の塚を描くことができる（第10図１）。その特徴は、真北に近い座標北を中軸線として設計されたことである。その結果、塚全体が座標北に対して約45度に振れて、東西南北の各隅の方位が定められているのである。

次に、行人塚・塚群の造営計画をみる。主塚である行人塚は、一辺約20m、高さ3.2mの測定値が得られている（小川町1999）。この塚の造営計画について、新屋敷塚の造営尺である曲尺によって復元すると、前者の２倍、一辺60尺の方形であったと推定できる。造営計画を示すために、磁北方位は座標北に替えて示した（第10図２・３・４）。

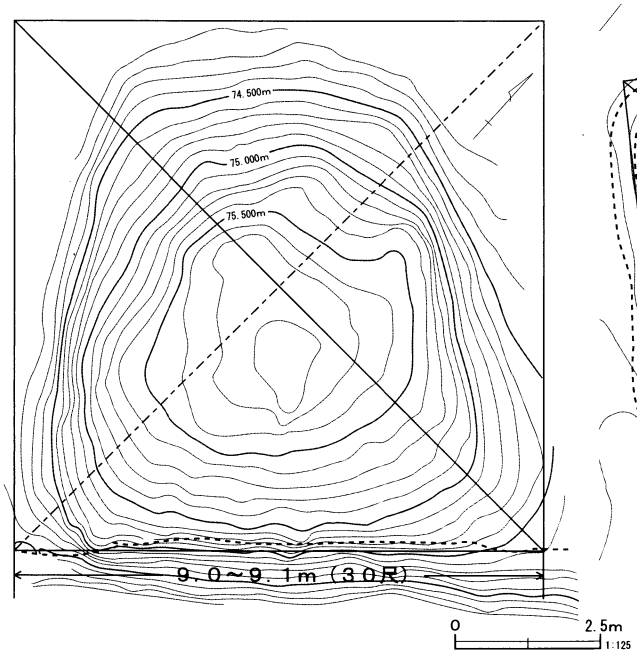
推定造営計画では、新屋敷塚の一辺の長さの２倍、面積４倍が行人塚であり、一辺30尺を目安とする塚の造営基準が考えられる。その規模は１尺＝30.166cm　60尺×30.166cm＝18.1mとなる。

推定復元図を基に造営当時の状況をみると、東西南北の隅は、造営計画推定ラインにほぼ重なる。この推定復元によって塚の形状をみると、北隅・南隅と東隅・西隅を結ぶ両対角線上に稜線が形成されていることがわかる。さらに、塚の頂部にはわずかに傾斜をもつが、一辺約５mの平坦面が造られていたと推定できる（第10図２）。この塚頂部の平坦面は、新屋敷塚にも認められたことである。つまり、塚の立面形は左右対称の台形状であった可能性が高い。また、各辺は造営推定ラインが４隅からややはみ出し膨らんでいるが、後世の変化が加わった可能性がある。

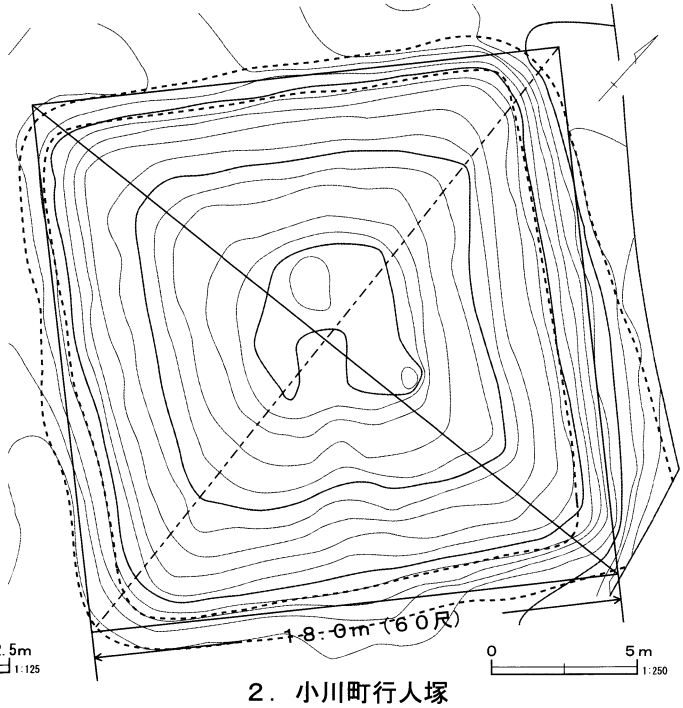
行人塚の中軸線は、座標北に対し西に約６度偏している。しかし、座標北に対し中軸線が西に振れる復元結果は、図上での復元であり、誤差を考慮すれば北隅は磁北ではなく、座標北を意識した計画であったと考えられる。

ここで小川町の行人塚と塚群全体の配置についてみる。比較的塚盛土の保存状態が良い第７号・９号・10号・14号・15号の５基の塚の各中軸線を推定する。これら５基の塚と主塚の中軸線との関係は、何れも主塚とほぼ同一方位であることが指摘できる（第10図３）。塚群の造営時期は各々相前後すると考えられるが、１つの造営基準として、塚群の中軸線に共通性が認められるのである。塚の造営計画には南・北を意識する子午の考え方があった可能性がある。即ち、子午線と南北隅がほぼ一致する造営計画を想定することができる。

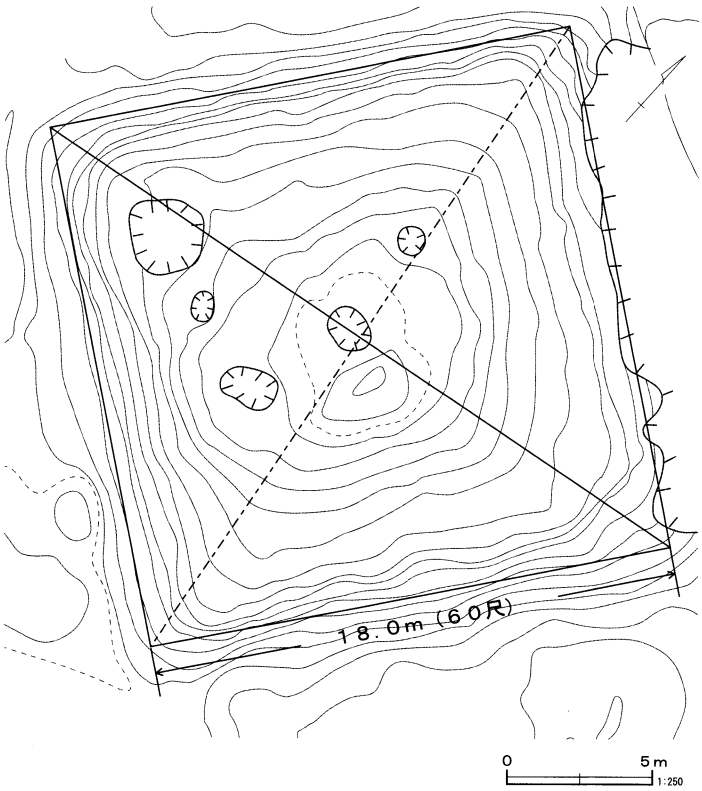
次に、熊谷市（江南町）大字成沢の行人塚・塚群は、主墳１基と６～８mの小規模な盛土が認められ



1．小川町新屋敷塚



2．小川町行人塚



4．熊谷市（江南町）行人塚

3．小川町行人塚塚群

第10図　塚の造営計画

る４基の塚で構成される。主塚は一辺23m、高さ2.9mの測量結果が得られている(江南町1995)。主塚は、後生の変容が大きく造営企画を求めることは難しい。しかし、小川町の行人塚・塚群と同様に、座標北を意識した造営計画であった可能性が高い。主塚は座標北に対して、約６度西に振れる中軸線である点も共通している。また、１辺60尺として推定復元すると、南東辺と東隅のコンタラインに大きく崩れがみられる（第10図３）。

以上の検討結果から、塚の造営に座標北を中軸とする理由は、子午を意識した結果と考えられる。即ち、冬至（太陽の黄径が270度に達する時期）の日には、塚の南隅と太陽の方位がほぼ一致することが、塚の造営計画に関わっていた可能性が高い。

なお、江戸時代の文献史料には冬至が庶民の日常生活に関わる積極的な記述があまり認められない。

引用・参考文献

今井　宏　1991 『大杉・岡原・蟹山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第114集

上野真由美　1998 『大杉遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集

梅沢太久夫　2003 『中世北武蔵の城』―城郭資料集成― 吉田書院

梅沢太久夫ほか　1979 『越田城跡』埼玉県遺跡調査報告書第20集　埼玉県教育委員会

小川町　1999 『小川町の歴史』資料編１考古

金井塚良一・植木弘　1980 『金平遺跡』発掘調査報告書　嵐山町教育委員会

金子直行　2001 『川越城・小在家』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第273集

川口　潤　1992 『蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集

小泉袈裟勝　1977 『ものさし―ものと人間の文化史22―』財団法人法政大学出版局

江南町　1995 『江南町史』資料編１ 考古

後藤宏樹ほか　1994 『尾張藩麹町邸跡』新日本製鐵株式会社・紀尾井町６－18遺跡調査会

後藤宏樹・金子　智　2003 『東京駅八重洲北口遺跡』森トラスト株式会社・千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会

小宮山克己・保田義治　1997 『四津山』 小川町遺跡調査会

埼玉県立歴史資料館　1983 『鎌倉街道上道』歴史の道調査報告第１集　埼玉県教育委員会

高橋好信　1991 『越祢（１次）・（２次）・六所遺跡（１次）・（２次）』小川町埋蔵文化財調査報告書第１集

高橋好信・保田義治　1993 『岡原・越祢遺跡』小川町埋蔵文化財調査報告書第３集

高橋好信・保田義治　1995ａ 『六所（３次）日丸・町場』小川町埋蔵文化財調査報告書第４集

高橋好信・保田義治　1995ｂ 『八幡台（１次）・大杉（１次）・町場（２次）・中井遺跡（１次）』小川町埋蔵文化財調査報告書第５集

谷井彪・宮崎朝雄　1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

永井久美男編　1996 『日本出土銭総覧1996年版』兵庫埋蔵銭調査会

長佐古眞也　2006 「流通②関東・江戸」『江戸時代のやきもの―生産と流通』財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

村上伸二　1996 『埼玉県指定史跡 杉山城跡 第１・２次発掘調査報告書』嵐山町埋蔵文化財調査報告書８

村上伸二　2000 『金平遺跡Ⅱ』嵐山町遺跡調査会報告９　嵐山町遺跡調査会

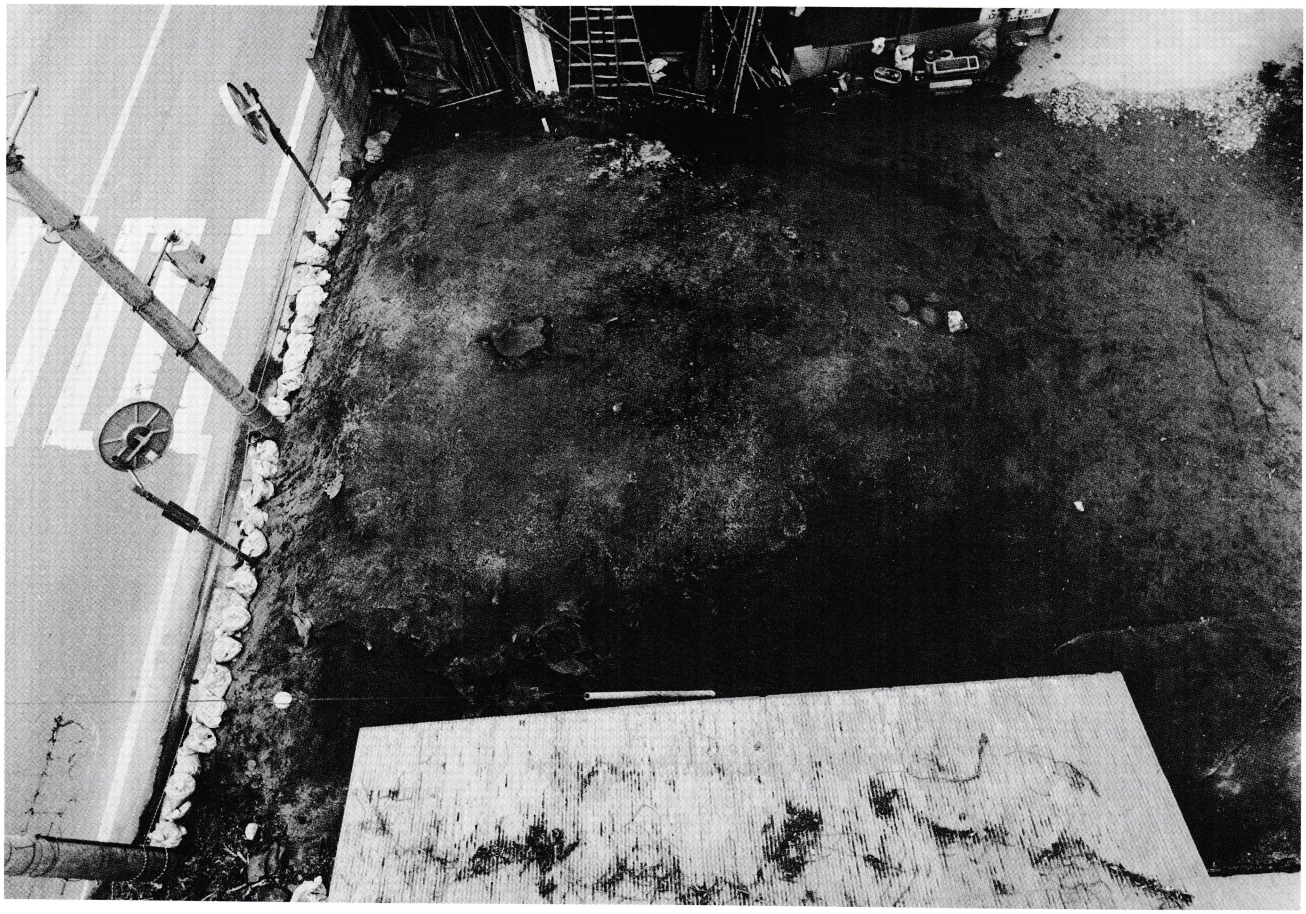
保田義治・高橋好信　1997 『久保ヶ谷戸遺跡』小川町埋蔵文化財調査報告書第10集

保田義治・吉田義和　1997 『大杉（２次）・台ノ前遺跡（３次）』小川町埋蔵文化財調査報告書第11集

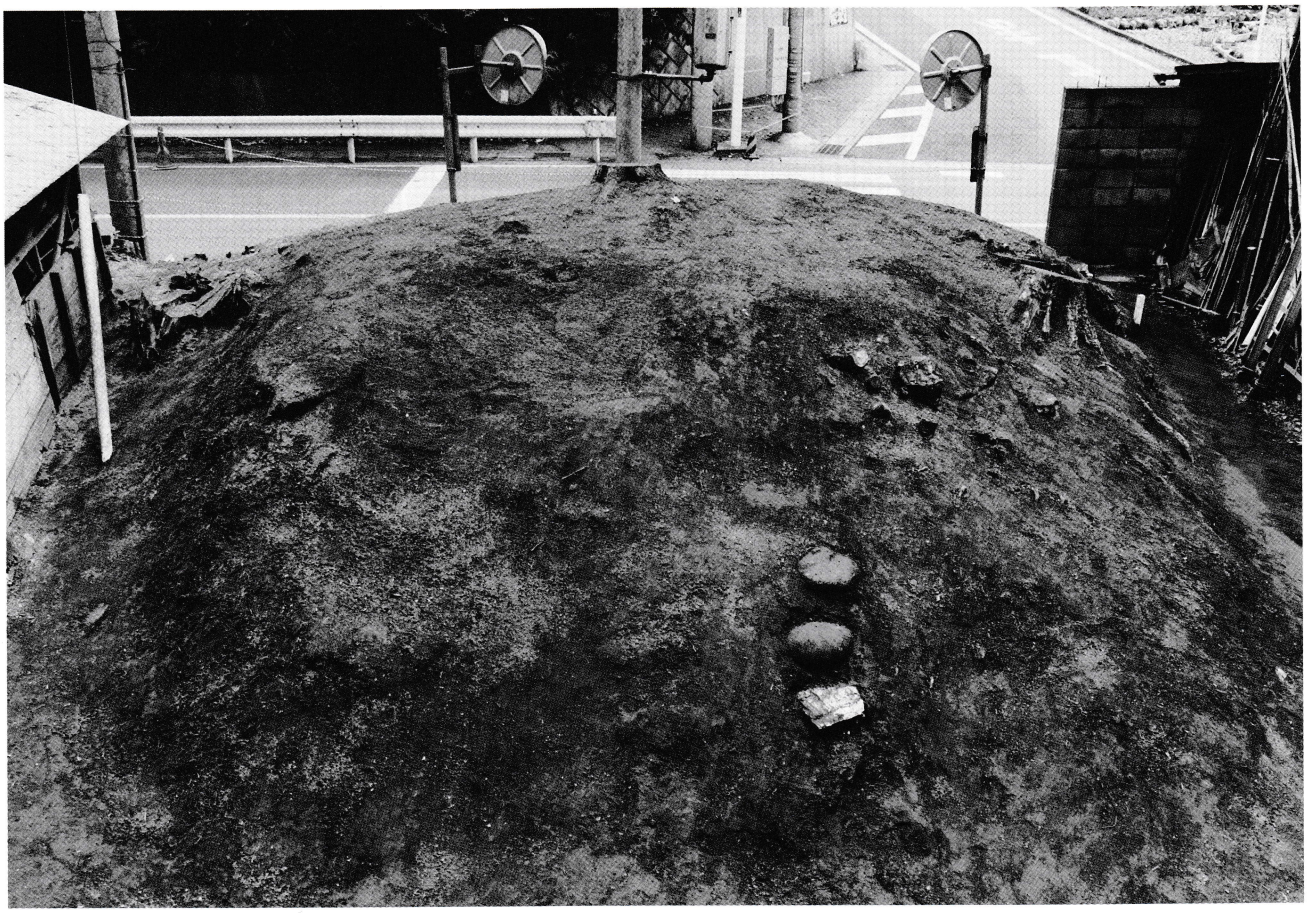
保田義治・新井貴　2002 『日向・町場遺跡』小川町埋蔵文化財調査報告書第17集

写 真 図 版

1　発掘調査着手以前の塚

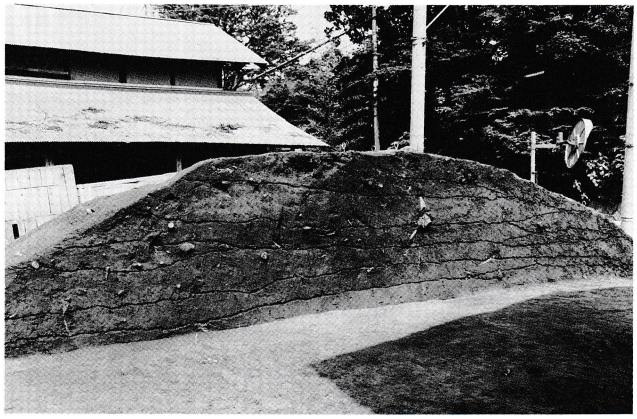


2　塚の全景（空中写真）東側から



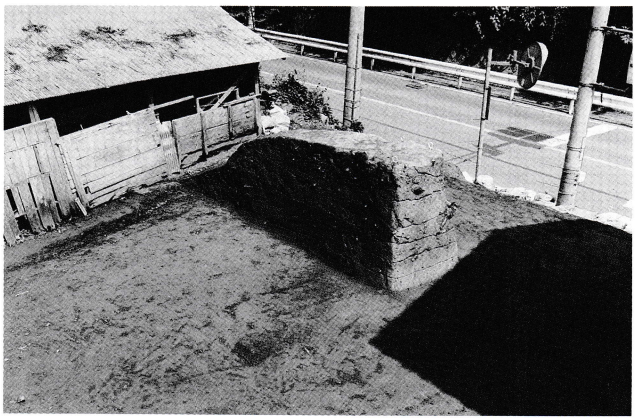
1　塚北側

2　塚北西部の盛土状態

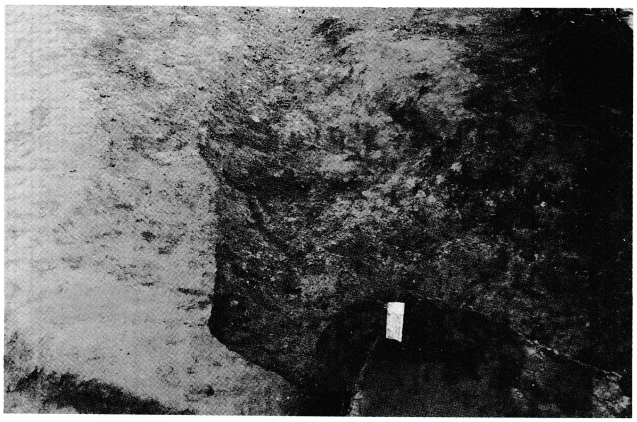


1　塚南北断面

2　塚中央部の盛土状態

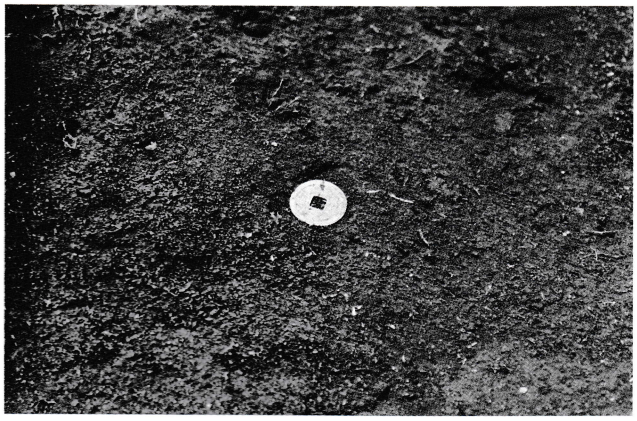


3　塚東側の盛土状態



4　調査区南隅の溝

5　咸平元寶出土状態



6　寛永通寶出土状態

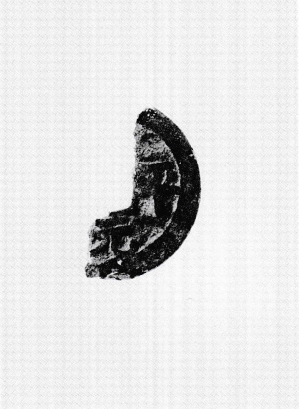
7　塚西隅の土器出土状態（1）

8　塚南隅の土器出土状態（2）

1　土師器系土器皿（第８図１）

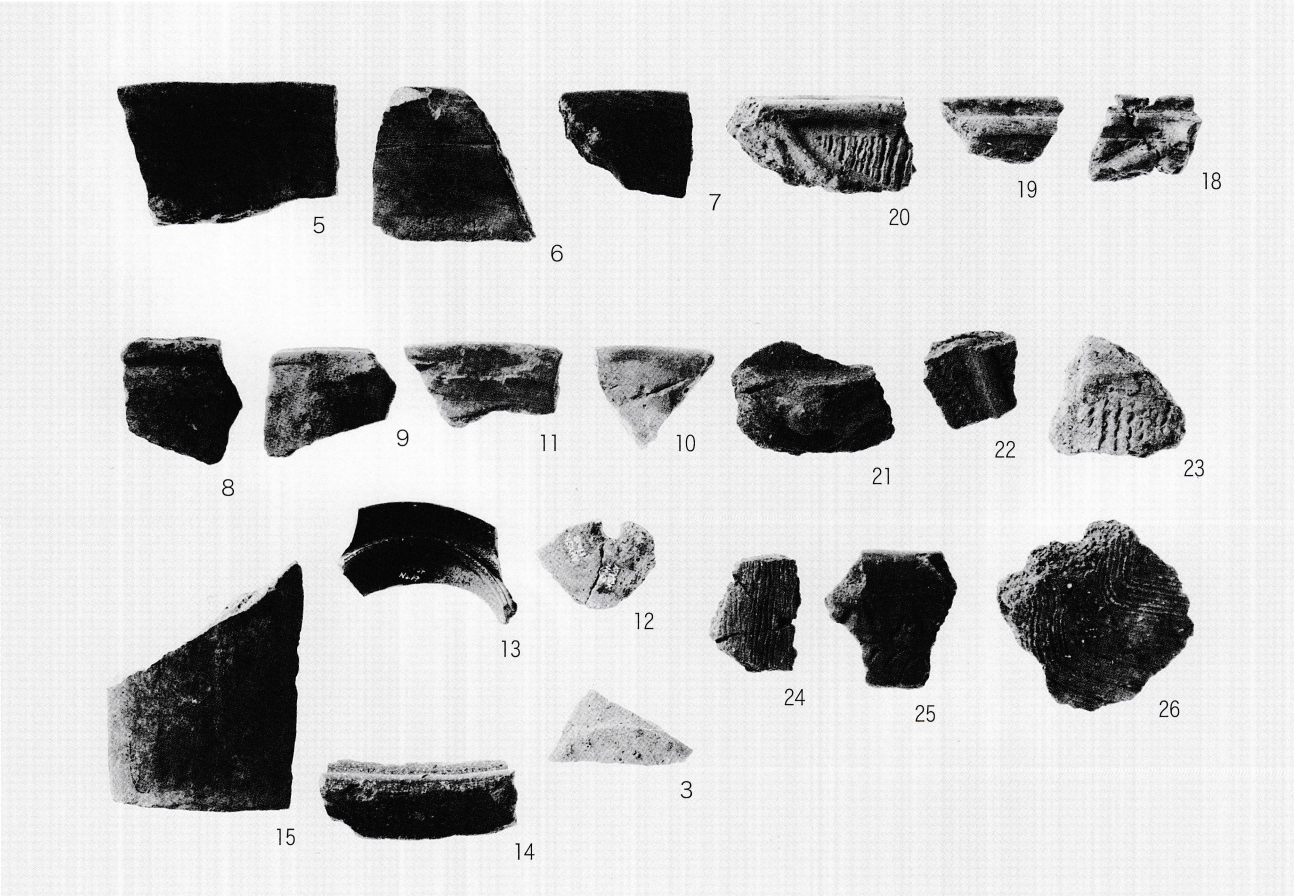
3　土師器系土器皿（第８図４）

2　土師器系土器皿（第８図２）



4　咸平元寶（第８図16）

5　寛永通寶（第８図17）



6　塚盛土の出土遺物（第８図５～15・18～26）

報告書抄録

ふりがな	あらやしきつか
書名	新屋敷塚
副書名	自転車歩行者道整備工事（埋蔵文化財発掘調査業務委託）報告 主要地方道熊谷小川秩父線／比企郡小川町上横田地内
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第335集
編著者名	坂野和信
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369－0108　埼玉県熊谷市船木台４丁目４番地１　TEL 0493－39－3955
発行年月日	西暦　2007（平成19）年３月20日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新屋敷塚（あらやしきつか）	埼玉県比企郡小川町大字上横田561番地１（さいたまけんひきぐんおがわまちおおあざかみよこた）	11343	090	36° 04′ 38″	139° 17′ 12″	20060628 ～ 20060929	80㎡	歩道整備

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新屋敷塚	塚	江戸他	塚　1 溝跡　1	近世土器 中世土器 縄文土器 古銭	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第335集

比企郡小川町

新屋敷塚

自転車歩行者道整備工事（埋蔵文化財発掘調査業務委託）報告
主要地方道熊谷小川秩父線／比企郡小川町上横田地内

平成19年３月15日　印刷
平成19年３月20日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　埼玉県熊谷市船木台４丁目４番地１
電話　0493（39）3955
http: //www. saimaibun. or. jp

印刷／朝日印刷工業株式会社